琉球大学学術リポジトリ

第一次世界大戦と戦争詩人　トマス・ハーディからアイザック・ローゼンバーグまで（3）

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-10-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉村, 清, Yoshimura, Kiyoshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18208

Ryudai Review of Language & Literature No. 36, 1991

第一次世界大戦と戦争詩人
トマス・ハーディからアイザック・ローゼンバーグまで（Ⅲ）

吉村　清

前号ではいわゆる〈大戦賛美派詩人〉たちに焦点を置き、開戦当初の〈戦争熱〉に浮かされた彼らの戦争詩には時局便乗的態度が露呈しており、彼らは大戦を西欧文明にとって最悪の事件として捉えることなく、むしろ中世ロマンスの延長戦上で大戦を捉え、類型的で陳腐な詩語を多用してヒロイックに、ロマンティックに戦闘を表現する安値な詩作態度を露呈していた、という事実を検証してきた。だが、当然ながら、長期化し、泥沼化し、総力戦の模様を呈する大戦を直接経験することによって、詩人たちの中には大戦の有する苛酷な現実を直視し、疑問視し、そのような現実を題材として批判的に詩作化する者が出現してきた。本稿では、Charles Hamilton Sorley（1895～1915）を取り上げ、彼の書簡や詩の中に表れるドイツ観とイギリス観とを根底にした、大戦に関わる2つの貌、すなわち1将校としての立場から、義務感と使命感を意識しつつ、戦争のもつヒロイックな面に魅了され、その心情をロマンティックに詠った貌と、それと併存する大戦を悲劇として捉え、時流に逆らうように、怒り、恐怖、皮肉、憎悪などの感情を込めて反戦のメッセージを詠った貌を取り上げる。この両面は詩人の内部で葛藤することは滅多になく、彼はその併存を許容しているように思われる。ソーリーがどの様な理由でまた如何なる形で大戦に傾倒し、また逆にその虚偽性、愚劣性、不条理性を告発していったのかを考察し、彼はルパート・ブルックに代表される〈大戦賛美派詩人〉とウィルフレッド・オウエンたち〈反戦詩人〉との間に位置し、両派の特質を併有した架け橋的役割を担った詩人であることを考察したい。

前号で紹介したようにソーリーは、1914年の1月からドイツへ遊学中で、対戦勃発から5日後の8月2日にドイツ政府によって逮捕されたが、すぐに釈放

された。その後彼は帰国し、過激なまでのパトリオティックな世論の重圧に屈し、バーゴンジーによれば「義務的で、熱意のない愛国心にかられ」（*Hero's Twilight 52*）、サフォーク連隊の第７大隊に少尉として配属され、軍事訓練を受けた後、翌1915年の５月にヨーロッパ戦線に赴いた。同年８月には20才の若さで大尉に昇進したが、10月のルースの戦闘で戦死した。ソーリーの作品は彼の死後、その父W. R. Sorleyによって1916年に編集され、出版された詩集*Marlborough and Other Poems*に収められており、また彼の書簡は同じく彼の父によって1919年に*Sorley's Letters*として上梓された。

まず最初に、大戦に関する彼の書簡に表れたドイツ観とイギリス観とを比較し、それらを大戦をモチーフにした詩と関連づける過程で、彼独自の戦争体験と戦争観の文学的意義を考察することにする。前述したように、彼は1914年の１月から８月まで、ドイツに滞在しその国の言語と文化を学んでいたのであるが、ドイツに対する深い愛は彼の書簡に色濃く表出している。ドイツ到着直後に彼はドイツ兵たちが行進しながら歌う軍歌に圧倒され「そのとき、この国はなんとすばらしい国なんだろう。もし戦争が起こったら、どちらが勝つかを理解できた」（拙訳　以下書簡・詩とも同様）とある書簡の中で述べている。また、別の書簡でも陶酔的なトーンで、ドイツに対する愛着の念を表明している。

> 彼らは歌い叫んでました――祖国に対する栄光的で僕にとっては意味不明な歌を（イギリスでは軽蔑すべき軍歌と見なされたでしょうが、ここドイツではそうではありませんでした。）、歌が最も迫力を増したとき、僕は多分ドイツのために死ねるだろう、と感じました――イギリスに対してはそのような感情を抱いたことはなかったし、これからもないでしょうが。その歌がやむとこの感情は薄れてゆきましたが、――だが、その感情を僕は味わったのだし、そしてパトリオティズムとは何か、という問いに対して生まれて初めて、莫然とですがその答えをつかんだのです。――それは異国の地でのことです。すてきでしょう？

John Pressによれば、ソーリーは「ドイツ人たちがゲームに興ずるときの軽やかな精神を、自らを滑稽化しうる心の広さを、彼らのエネルギー、理想主義、そして洗練されているがゆえの冷笑主義の欠如を賞賛している」（202）。詩

人の親独的な姿勢は、冷笑主義に支配された母国と、それに冒されていないドイツ国民とを比較した次の書簡の中にも窺われる。「ここ［ドイツ］では冷笑主義は悪徳としては存在しません。人はサラダにとって不可欠な酢のようにそれを求めます。イギリスでは［サラダに］酢が過剰に入っているため、キューリを見つけることは不可能です」（［　］内筆者。以下同様）。ソーリーのドイツ賛歌は、両国民のいわゆる「不道徳文学」に対する反応についての洞察に富む次の書簡にも表出している。

> ドイツではワイルドとバイロンは作家として評価されています。イギリスでは人々は二人の情事についてあら捜しをするだけです。ある本を「不道徳的である」とか「道徳的である」という人は批判されるべきです。本それ自体はどちらでもないからです。それは読者自身の道徳性と不道徳性の問題なのです。

これまで見てきたように、ソーリーはドイツでの遊学中の体験をもとに同国への強い傾倒を表明ししているが、彼はドイツ国民の洗練された気質や社会的・文化的美質のみを盲目的に賛美しているわけではなく、ドイツに対する鋭敏な批判精神ももちあわせている。次にあげる1914年7月付の書簡では、彼が在籍していたイエナ大学の士官候補生たちの理不尽な「後輩への雑用の強要」とその延長としてのユダヤ人に対する悪質な「排地主義」の伝統を厳しく批判している。

> あなたは士官候補生はそう悪くない、といっています。しかし彼らはひどいのです！　最悪です。・・・　彼らはイエナ大の学生総数の3分の1しか占めていませんが、同大はドイツの全大学の中でも最も伝統的なところです。・・・それぞれの班の中での、6名の最下級生に対する「雑用の強要」のひどく特異な特徴として、飲酒の強制、外国人に対する加虐的行為の強制、それに病的なまでの反ユダヤ主義などが指摘できます。僕がつきあっている学生のほとんどはユダヤ人ですが、彼らの耐えねばならない侮辱に関する話から、多色で派手な制服を着てふらつき回る士官候補生の最悪な側面を認識するのです。

詩人のドイツ批判は、彼が「兄弟同士の相克」として特徴づけている大戦で、

対決しているドイツとイギリスに対するアンビバレントでやや楽観的な態度にも見られる。

> 僕は今度の戦争を、マルタとマリア［『新訳聖書』ルカ伝10：38—41参照のこと］という二人の姉妹の間の葛藤と見なします。有能だが非寛容な前者が、形式ばらない同情的な後者と対峙しているのです。それぞれが独自の美徳のために戦い、それぞれが自らの美徳から派生する悪徳を有しているのです。そして今度の戦争の物質的結果がいかなるものであれ、それが両者の美徳からこの2つの悪徳を除去するだろうし、そうなれば有能と寛容が和合しないことはもはやないでしょう。

また、反独感情がヒステリックなまでに高まってゆく母国の政治的状況の中でソーリーは、ある書簡の中で、世論に迎合せずに卓越した視点から、イギリスを支配している病的な反独感情、ドイツの持つ尊大さとその産物としての反ユダヤ主義に反映されている偏狭性を厳しく攻撃している。

> 人々がドイツを避難するときにあげる罪科には、力は正義であり、強者は弱者を痛めつけても構わない、と同国が主張している2点があげられます。だが、同国は力を正当化しているのではなく、自国の卓越性に対して自信を持つことは妥当である、と主張しているのであり、卓越性とは精神的尊大さを指している、と僕は思います。僕たちは弱者虐待者とではなく、偏狭者と戦っているのです。

このような母国のドイツに対する極端なまでに排他的な態度とドイツという国家の持つ他国への頑固で偏狭な姿勢への批判的な立場は、プレスの指摘にあるように、「常套的な詩語への依存、個性的で強烈なリズムの欠如」（205）などの弱点ゆえに作品としては稚拙ではあるが、反戦の立場が明確にされた「ドイツへ」（1914年8月頃の作）と題する詩のなかで再強調されている。

> 君達は僕達同様に盲だ。誰も君達を傷つけるつもりはなかったのだしまた誰も君達の領土の制覇を主張したわけでもない
> だが両者は互いに手探りする者、拘束された思想の野を通って
> お互いにつまづき、そして互いに理解することもない。

このようにソーリーは大戦を両国の悲劇として捉え、両国を同時批判している

が、詩人は続けて、両国がともに相手国に対し「憎悪を込めてシーッという。そして盲が盲と戦うのだ」と述べ、両国の不条理な相互憎悪と戦争遂行努力の盲目性を告発している。最後に詩人は、前掲書簡に記された「今度の戦争の物理的結果が如何なるものであれ、それは二人の美徳から悪徳を除去し、そして有能と寛容はもやは和合しないことはないだろう」という楽観的な姿勢の反映ともいえるメッセージを語る。すなわち、両国が真の意味で、理解と愛情に基づく友好関係を樹立することの可能性を詠うのである。だが、その時が訪れるまでは過酷な戦況が持続することを荒れ狂う自然のイメージで綴る。

平和になったら、僕たちは再び
お互いのより真の姿を、新しく勝ちえた眼差しで見て
考えるかもしれない。情愛と温情の面でさらに成長し
固く握手し、過去の苦痛を笑うだろう
平和になったならば。だが、平和がくるまでは、この嵐
この暗闇、雷、そして雨。

次に、ソーリーの親独主義と対立する反英主義の源泉と本質を探ることは彼の戦争詩の理解にとって有益なことであろう。詩人は詩の中で、マールバラ周辺の自然の美しさを讃え、田園生活への愛をよく詠うのであるが、イギリス社会のもつほかの要素に対しては概して批判的である。まだ軍事訓練中の1914年11月14日付の書簡で、詩人はイギリスの中流階級のもつ欠陥に対する幻滅感と嫌悪感を吐露し、そのような母国のために、不本意な形で志願兵となったことを自己批判する肉声を勇気を持って明らかにしている。

イギリス――この言葉の響きにはうんざりしています。イギリスのために戦う訓練のさなかで、僕は意図的な偽善に対して対決する準備をしているのですが、その偽善とは世代から世代へと引き継がれてきたあのひどく怠惰な中流階級的見解と想像力の面での恐ろしいまでの怠慢のことです。・・・戦争が終結したら、勇気のある人々はおしなべて自国を去り、地上の異邦人や巡礼者となることでしょう。・・・だが、僕は彼らの勇気を持ち合わせていないので、この信念は意味のないことです。世論という苛馬車の車輪――巨大で、無様で、不格好な苛馬車の車輪――

の下敷きになった場合、人はなんと無力な虫けらでしょうか。僕は怠慢と愚劣に対して戦いを挑んでおくべきでしたが、世界で最も進取の気に満ちた国と戦うために、自分の肉体を（臆病を精錬することによって）捧げているのです。

また、詩人の眼は母国の戦争努力に焦点をおき、「兵役適齢期」にある男性を「昏睡状態」に陥らせ、軍事訓練によって徹底的に因襲化し、戦死させるために戦地へ追いやる国家や軍事的・政治的指導者に対して、殺意を込めた鋭い批判をおこなっているが、この姿勢は冗談抜きのものである（フセル 86）。

イギリスのしている戦争はこの国の「兵役適齢期」にあるすべての男たちを常態的昏睡状態に陥らせていますが、これは彼らを戦死させるための前段階なのです。彼らは因襲的になるために6か月の訓練期間を与えられ、それで神との和解を達成し、その後戦場へ送られ戦死させられるのです。たとえ戦死しなくとも、帰還したときは彼らはもうどんな仕事にも適さなくなっており、その結果再び軍隊へ戻らざるをえないのです。僕は今度の大戦に対して最も責任のある人が誰であれ、本当に殺したいと思っています。

わが国が勝利を収めるようには見えませんね？　見えますか？　この戦争は数年に及ぶように思われます。もしそうなるのでしたら、肩に小さな（こざっぱりして、滑らかな）弾痕がつくだけですむように、と祈っています。

最後の3行の予想は、大戦の長期化を予感する点を除いては、連合国側の勝利と大戦前期での詩人の戦死という皮肉な結果と相反することになる。

戦争の激化と長期化にともない、ソーリーの批判の対象の範囲は拡大し、自分が受けたパブリック・スクールの理想とする価値観を攻撃し、また国家の戦争努力を盲目的に支持し、国民の戦意を鼓舞することに夢中になっていたジャーナリズムや文壇への辛らつな批判となって展開してゆく。彼は軍隊での体験を契機に、パブリック・スクールが偽善的形式主義に堕落し、熾烈で低俗な競争原理にもとづく、ライバル意識の高揚に積極的に意を注いでいる現実を糾弾する。

パブリック・スクールに属することの罪科は、生徒は常に鏡の前で［模範的な生徒を］演じ、人に与える印象を常に考慮にいれなければならないということです。そこは競争なしには進歩はありえないという廃れた誤謬にもとづいて経営されているので、ケームであれなんであれ、次元の低い本能の勝手気ままな振舞いを許容するところになり下がっています。

当時の文壇の保守的な作家たちとジャーナリズムがとった戦争支持の姿勢に対するソーリーの批判の声はパブリック・スクール批判の声に劣らず激しく、皮肉に満ちている、といえよう。「わが国の詩人たちと文人たちの声は立派に訓練されており、また聞く耳に甘美に響く。その声は鋭意な表現と豊かな情感に満ち、繊細で卓越した技量を示し、喜ばせ、へつらい、魅了し、安らぎを与えるが、抜け目のない当世風な嘘なのです」。彼はジャーナリズムの大戦支持の立場に安易に迎合する文壇に対して批判を行うが、特にトマス・ハーディとルパート・ブルック批判にその顕著な例を見ることができる。ハーディは大戦勃発から1か月後の9月5日付の『タイムズ』紙に「行軍する兵士たち」を掲載し、国民と兵士たちの戦意を鼓舞し、殉国精神を美化している。その後この詩は*Satires of Circumstances*（*1914*年刊）に収められたが、彼を崇拝するソーリーによって、同年の11月30日付の書簡の中で激しい批判を浴びることになる。

この詩は今度の詩集の中でも最悪であり、出征する下士官たちの感情を歪めて伝えており、「勝利は正義の士に輝く」という詩行は『モーニング・ポスト』紙の一面記事からの盗用であり、正義を勝利などという物質的報酬でもって中傷することを軽蔑してきた詩人にはふさわしくありません。

「ソーリーはハーディを攻撃しているが、それはイギリスが正当な立場にある、というハーディの信念故ではなく、むしろ正義の側に立つ者が常に勝利という物質的報酬を与えられる、という非現実的な信念をハーディが表明しているからであり」（シルキン　51）、反独感情が知識人たちをも支配していた当時において、ソーリーは時局に身を任せず、戦争熱の虜になることを拒み、超然とした成熟度の高い議論を展開している。前述のハーディ批判は、次にあげるソー

リーの1914年9月20日付の書簡と的確に呼応している。

> 冗談のつもりでいうのですが、自明の大義でも敗北しうるという例として、僕はドイツが勝戦することを希望します。それが世界のためになり、「我々の大義が正当だから、我々は勝利を収めばならない」という信念ではなく、「我々の大義が正当だから、我々は敗北を無視できる」という信念こそが、真の信念であることを示すために。

1915年4月付けの書簡では、ソーリーは同月に戦地で病死した詩人ルパート・ブルックが突如ジャーナリズムによって戦争の犠牲者・英雄の地位に祭り上げられると、国家のプロパガンダの手段と堕したジャーナリズムとブルックの *1914 and Other Poems*（*1915*年刊）の基盤となっている戦争に対するセンチメンタリズムを批判の対象とする。

> 『モーニング・ポスト』紙でルパート・ブルックの死を知りました。『モーニング・ポスト』紙はこれまで彼を認めていませんでした。今では彼を声高く賞賛しています。というのも、詩の唯一の題材は激しい肉体的体験、とりわけ戦死であるという同紙の主張する馬鹿げた文芸批評の理念に、彼が合致しているからです。・・・あなたが送ってくれた『タイムズ・リタラリー・サプルメント』誌で取り上げられたブルックの一連のソネットは激賞されていますが、僕は賞賛され過ぎていると思います。彼は自己犠牲の観念の虜となり、彼にとって（ほかの人々にとっても）出征することは非常に熾烈で際だった犠牲的業績である、と彼は見なしていたのですが、それは状況の変化によって彼に（またほかの人々に）要求されているだけの行為に過ぎず、その要求を拒絶したならば、生きることが耐えられなくなるからに過ぎません。・・・彼は立派な言葉で自分の姿勢を飾りましたが、それはセンチメンタルなポーズだったのです。

上記のソーリーのブルック批判はブルックに対する個人的批判というよりは、プレスの考察にあるようにブルックを「育成し、彼のソネットを過度に賞賛した文化への攻撃」（206）と見るべきであり、またブルックの死は「その馬鹿馬鹿しさで僕の胸をますます満たします。彼は太陽のまばゆい光で殺されたの

であり、それは彼の有していた総体的な太陽のイメージと一致しており、彼のとったポーズのクライマックスとなっています」（ロジャース　416）と述べ、犠牲者・英雄として一般市民の心情に広く訴えた、と皮肉るD. H. ローレンスと同色の時局を超越したトーンである、と評価できるであろう。

*1914 and Other Poems*において戦争を賛美し、自己を英雄化するポーズをとったブルックに対して、ソーリーは強い批判の声をあげたが、1915年9月8日付の書簡では、戦争の恐怖を十分に体験した後にも関わらず、学友であり戦友であった1兵士の戦死とそれに伴うヴィクトリア勲章の叙勲に際し、その出来事を記念すべく陳腐な詩語を使用して「名誉の戦死」の概念を肯定し、栄光化するエピタフをつくり、これまで認識できなかった彼のもう一つの貌を呈示している。

これほど君にふさわしい結末はない
　　もう胸焦がしたり、ため息をつく必要はない
僕たちは彼のものとなった栄光を認める
　　決して滅びることのない栄光を

プレスはソーリーが「パブリック・スクールの多くの要素を嫌悪したが、彼は自己犠牲、勇気そして義務への貢献［の重要性を］説く他の要素を決して捨て去ったわけではない」（206）と主張し、戦友が「自己犠牲、勇気そして義務への貢献」の精神を戦死という行為を通じて発揮したことに、ソーリーは敬意と哀悼の意を表している、と説明しているように思われる。一方、プレスの論文を「混乱し不正確である」（74）と批判的に読み、詳細な攻撃を加えるシルキンはこのエピタフについては何の反応も示していない。「正当な戦争なんていうものはない。僕たちが行っているのは悪魔による悪魔の放逐なのだ」とまで過激に反戦の主張を行ったソーリーの基本的姿勢に、このエピタフは明らかに矛盾対立し、「死んでゆく死者たちゆえにイギリスは幸せだ」と詠ったジョン・フリーマンや、戦死者たちが「死によって黄金よりも貴重なものを残してくれた」と詠んだブルックたちに限りなく接近している印象を受けるが、詩人はこのことを問題にすることはしない。ウィルフレッド・オウエンは、「無益」という詩の中で、雪降る戦線で戦死した兵士の死体を見て「土からできた人間

が成長したのはこんなことのためだったのか」という、戦死に対する深い疑念と虚無感を表明しているが、このような姿勢はソーリーのエピタフにはまったく見いだせない。ソーリーのエピタフには戦友の戦死の美化を通して、自らの兵士としての立場を栄光化するしようと試みている若い戦争詩人のうちにあるブルック的傾向が呈示されている。またソーリー自身「君達が無数の無言の死者たちを見るとき」と題する詩のなかで、銃後で安全な生活を送る市民たちの夢に現れる「無数の死者たち」にとって「安っぽい甘言」、「賛美」、そして「名誉」は不要だと述べ、「死ぬのはたやすい」と述べているが、詩人は詩を軽視しているのではなく、機械化された大戦における1兵士の無力さ、その命のはかなさと脆さを強調し、戦争の過酷な現実を想像することのできない市民たちを批判しているのである。このエピタフでいう「栄光」とは一体何を意味するのであろうか。戦場で発揮された勇気と使命感の結果としての古典的な「名誉の戦死」を指すのであろうか。あるいは無意味で残酷な戦争からの永遠の解放を意味し、そのなかに戦場体験をともにした戦友への適切に表現しきれない友情と追悼の意味を含めているのであろうか。あるいは戦場での個別の体験に対して、一貫した態度が示せない、詩人の限界を物語っているのであろうか。既成の戦争観に妥協し、内部に矛盾をはらませながらも、その矛盾を解決することなくハーディ的感覚でこのエピタフを書いている、と考えるのは筆者だけであろうか。残念ながら、戦友の死を悼みかつ惜しむはずのこの詩には、既成の「名誉の戦死」の観念を超越するために自分と格闘した形跡が窺えない。D. J. Enrightは大戦に対するソーリーの態度は「後期の作品でより力強くなったが、それは大戦を国家と国家の対立と見るよりも、為政者と兵士たちの相克と見なしていたように思われ、ブルックの態度よりも思慮深く、人間的で、的確である」（199）と評価しているが、エンライトの評価は、詩人の一方の貌だけを指摘しているに過ぎず、必ずしも的をえたものとはいい難い。

さらに、1915年7月15日作の「僕はオデュッセイアを持っていない」という詩では、ホーマーの描いたトロイ戦争をヒロイックに見るソーリーの姿勢が濃厚に打ち出されており、「海を越え出征する学徒たちに／戦いに対する恐怖感はない」と詠い、大戦をトロイ戦争同様にロマンティックな冒険として位置づ

けている。

偉大な戦争の物語と強靱な心の苦痛
武器の激突、作戦会議での喧騒
早々に滅びねばならない美
戦闘の憎悪、戦闘の驚喜
風に吹きさらされたトロイの城壁
古へからの戦闘の喜び、昔からの戦闘の苦悩
海を越えて出征する学徒たちに
戦いに対する恐怖感はない

時局便乗的なブルックやグレンフェルのように、ソーリーは戦争を美的にかつヒロイックに見る当時の支配的で安直な姿勢を表出しているが、このような傾向を一過性の幻想として把握する透徹した視座はまったく確立されていない。プレスは*Great Writers of the English Literature: Poets*の中で、ソーリーを「大戦の恐怖と興奮を伝える才能」（927）の持ち主と位置づけているが、彼のいうように戦闘に対するナイーヴで野生的な興奮を表現した詩として「戦闘の苦悩」さえ美化された詩として、この詩は理解できる。というものもこの詩に関する限り、ホーマーの描く戦士たちの「勇敢に戦い、勇敢に死ぬ」というモットーが引き継がれ、遠い昔に起きた英雄たちと神々が二手に分かれて争ったのどかな、スポーツ行事のようにトロイ戦争と大戦を安易に重ね合わせている、ということには疑いの余地がないからである。Joh Stallworthyはソーリーがこのような詩を書いた理由として「永い文化的伝統の催眠術的威力、1世代に未来ではなく過去を直視することの重要性を説いた教育の悲劇的結果」としている（xxvii～xxviii）。だが、もちろん、ストールワージーの主張する「永い文化的伝統の催眠術的威力」に操作され、戦闘によって引き起こされる興奮を肯定し、それに文学的表現を与えたのはソーリーだけではない。例えば、反戦詩の代表的存在と見られるサスーンとオウエンの二人も、戦争体験の初期の頃には同様な反応を示している。バーゴンジーによれば、大戦勃発の直後にサスーンは「赦免」と題する詩を書いたが、その詩にはブルック的戦争肯定の傾向がみられる（*Hero's Twilight 92*）。

僕たちが目にするものすべてに美が輝くまでは
地球の苦悩は僕たちの目を赦免する
戦争は僕たちの苦悩のもと、しかし戦争は僕たちを賢明し
そして、自由のために戦うことによって、僕たちは自由なのである

この詩には「戦没者を悼む」という追悼詩の中で兵士たちは「自由を守るために、倒れていったのだ」と戦死を美化したロレンス・ビニヨンと類似するトーンが感じられる。開戦2日前に志願兵となったサスーンは、大戦に対する疑問を抱きそれを告発していくようになるまでは「勇気は美しいもの」と信じ、献身的でヒロイックな将校であった。彼とは対照的に、オウエンは開戦の翌年の10月20日までは志願にすることを躊躇していたが、彼でさえ1917年の1月付けの戦線からの母への書簡の中で 「今朝負傷しました！・・・フランスにいることにはヒロイックな高揚感がともないます・・・でも興奮は僕の幸せのためには常に必要なのです」と述べ、戦争を賛美する姿勢を呈示している。

さらに、戦死する約1週間前の1915年の10月5日付の手紙でソーリーは兵士であることによって生ずる開放感を表明している。

自由思想家は彼らの精神を従属へ向かわせるべきです。というのも、行動と決意を従属に帰せれば、僕たちはこのうえない安息を得られるからです。最近このように思い始めています。・・・多分いつの日か、僕や僕に似た人々は見境のない反逆者になるでしょう。でも現在のところ、僕たちは自らを兵士することに非常な開放感を味わっています。

このような戦争肯定の態度は、今までのソーリーの戦争否定あるいは嫌悪の姿勢とは矛盾する。プレスの議論を批判したシルキンはこの書簡については巧妙にも言及を回避している。さらに、戦場を緊張、興奮、ショック、動揺の渦巻く場、日常生活からの開放の場となる詩人は、

その［戦闘の］サイダーを飲め・・・それは自分の内部から新しい部分を引き出してくれ・・・精神的恐怖など無関係な美と平静さを与えてくれる。80時間以内には僕たちはサスペンダーをつり上げ、戦うのだ。戦闘の時間は僕に訪れ、僕は興奮のうちに突撃し、順次に、批評家、俳優、英雄、臆病者、そして運命の兵士を、またおそらく瞬時にせよ「主のみ

旨が行われますように」などと口にする謙虚なクリスチャンを演じるだろう。次にショックを受け、動揺し、これらのうちの1つの出現、そして死ぬか生きながらえるかのどちらか。最後に［生きていれば］昔なじみの冗舌にもどるだろう。

と述べ、戦闘に対する2つの反応を併存させているが、この書簡についてプレスは*The Oxford Book of Modern Verse* (*1933*) の編者W. B. Yeatsがその序論で主張する「全ての偉大な悲劇の中で起こる悲劇は死ぬ者にとって喜びである」という悲劇観を援用し、ソーリーのこの書簡にも戦争を悲劇として捉えつつも、その中に喜びを見いだしている (210)、と主張しているが、ソーリーか表明しているのは戦闘の喜びだけであるとは思えない。プレスとは対照的に、シルキンはこの書簡のトーンは表面的にはユーモラスなトーンを装っているが、実は詩人の自意識の歪曲された反映であると反論し、詩人はこれ以外の方法では制御できない内面にある「何かを」(80) 示唆している、と主張している。だが、シルキンの議論はそれ以上展開していない。また、David Perkinsは「ソーリーの詩は1914年から1915年にかけて広く受け入れられていた大戦の幻想から明らかに自由であり、ハーディやハウスマンの影響を支えに、大戦による荒廃を心に描くためにアイロニックな辛らつさを表現した」(274) と述べているが、パーキンスはシルキン同様にこれまで論じてきたソーリーのもう一つの貌――戦争をロマンティックに捉える伝統を受容する姿勢――を無視してしまっている、といえよう。この書簡には、戦闘の限られた時間の中で、複数の役割を興奮と緊張のうちに即興的かつ野生的に演ずる兵士の複雑な心理を偽りなく把握することのできるソーリーの洞察力の深さと想像力の豊かさが表出されており、同時に詩人のロマンティスト及びリアリストとしての大戦に対する2つの反応が併存するかたちで呈示されている。

"Charles Sorley: A Spirit of Stern and Stoic Feature" と題する論文の中で、プレスはソーリーの大戦に対する複雑で多角的な態度を理由に、ソーリーの位置を戦争賛美派のブルックやグレンフェルたちに近い詩人として位置づけることの妥当性を疑問視しているが（ヒバード　199)、前述したようにソーリーはある意味ではブルック的傾向のある詩人であることは否定できないし、

また同時にLouis Untermeyerの指摘するように、ソーリーは「ジンゴリズム、過激なナショナリズム、偽まん的愛国調のスローガンによって透徹したヴィジョンを曇らされる詩人では決してなかった」（375）ことも事実である。

「詩人へ」（1914年9月作）と題する詩では、ソーリーは訓練中のあるいは戦場での兵士たちは「邪悪な霊」と「無言の霊」の持ち主であると詠い、彼らは自らが体験する「過酷な苦悩」を表現する術を知らないという「透徹したヴィジョン」を展開する。

僕たちにはあなたのように風采のよさはない
僕たちは苦労し、汚れ、紡ぐのです・・・

戦闘の轟音で魂を圧倒する
邪悪な霊を僕たちも持っています
だがあなたのよりもさらに邪悪な霊も持っています
それは内部にある無言の霊です
ひどく過酷な苦悩
でもそれに見合った苦悩の叫びは出せないのです。

ソーリーが「あなた」と呼ぶ詩人たちにとって表現不可能に見える苦悩は魅力ある題材となりえるが、「過酷な運命の盲目の紡ぐ手」（「それゆえ僕たちは無知のまま崇拝する」）である兵士たちにとって肉声化の不可能な苦悩は不満をつのらせるだけである（シルキン　246）。

ソーリーはある書簡の中で、イギリスとドイツ両軍の哨戒兵がクロバーの野で体験する「無言の遭遇」（それは無言の相互理解でもある）を通して、彼らの「過酷な苦悩」を無視し、「名誉の戦死の原理」を盾にして「無意味な戦死」を彼らに強制する軍部指導者たちを批判している。

哨戒兵は皆――イギリス兵ドイツ兵を問わず――名誉の戦死の原理に反発しています。だからサラサラと風になびく長いクロバーの野でお互いに向かって走っているときには、両者ともに自らがレビ人であり、相手はよきサマリア人であるというふりをして、無言で反対側に通り過ぎるのです。・・・彼らはお互いに相手を不快にすることは間接的に自らを

不快にすることであるということを知っているからです。ともに理解しようとは思わない背後にいる赤帽の権力者たちによって、強制的に互いの頭を激突させあうまでは。

上の書簡同様に、「おびただしダニのように僕たちは進む」（1914年9月作）においても、詩人は大戦が総力戦の様相を帯びてくるのを予感し、戦地へ向かう無数の兵士たちをおびただしい数のダニにたとえ、彼らの個性を破壊し、名前よりも軍隊番号を優先することによって彼らを無名化し、恐怖と悲しみに陥れ、やがては死に追いやる戦争遂行者たちへの抗議を行っている。

おびただしいダニのように僕たちは進む
車を使ったり、ジグザグ行進したりしながら
ある人々は死で黒くなり、ほかの人々は悲しみで青ざめ
僕たちをここへ送ったのは誰だ？　帰国させてくれるのは誰なのだ？

ソーリーは戦死する4か月前に「死」を意識したソネット2篇を1915年6月に書いているが、大量殺りくが日常化してゆく状況の中で書かれたこれら2篇のソネットでは、前掲の詩にみられた戦争告発の態度は姿を消し、人生を強く否定し、死を熱烈に肯定する姿勢が呈示されている。バーゴンジーによれば、詩人はソネットⅠにおいて、死をパラドキシカルなものとして捉え、死は人生で起こりうる最も偉大な体験であり、また同時にすべての体験の停止点であると見なしている（*Hero's Twilight* 56）。第1カトレインでは、詩人は死を「あなた」と呼び、死は最も偉大な存在であるので

聖者たちはあなたの高貴な魂を崇めてきた
詩人たちはあなたの名声に青ざめ
あなたの道を通過することを絶えず待っている
無数の人々の間に僕たちは立っている

と述べ、死を崇高な絶対者として位置づけている。次に第2カトレインでは、死とは「かつては縁遠かったが、今では非常に親密」になり、「すべての道に、あらゆる道端に」、死の「直立した堅固な標識を見る」と詩人は語り、死の編在性と死と人間との緊密な関係を強調している。最後のセステットでは、死の標識を「霧が遊泳し、風が叫び吹いた」「高い方を、丘の方」を示していた

「郷里の古ぼけた高い標識」のイメージと重ね、霧と風の支配する荒涼とした無人の自然への野性的な憧れを詠んでいる。詩人の希求する自然は「家もなく、友もいない土地」、「これまで知らなかったが、知りたいと願っていた土地」と規定され、彼の抱く死の世界へのつきることない関心と願望とに重ね合わされ、ロマンティックなトーンで詠まれている。ソネットⅡにおいても、「生前、この死者たちほど孤独で貧しい者はいなかった」と詠ったブルックのように、ソーリーは「非常に貧しくて明らかに不完全な」生を否定的に見、逆に死をヴィヴィドなイメージで慈悲深い存在として肯定的に描くことに意を注ぎ、死は

勝利でもなく、敗北でもない
ただ空のバケツ、きれいに拭かれた石板
生前のものを除去してくれるありがたいもの

・・・死は生命の消耗でもなく
押し潰された生命でも、壊されたバケツでもない

と述べ、死をポジティヴに捉えようと試みている。次に詩人はあらゆる人々にとって、死が絶対的な「平等主義者」であると強調する。「勝者も敗者も死においては同一だ。／臆病者も勇者も／味方も敵も」。そして「君の輝ける前途は以前はしぼんでいたのだが」、詩人が「巨大な染み」と呼ぶ死によってその「前途」は「触れられ、始動し、高くなり、芳しく成長し／花開きそして君自身となる。君が死んだときに」と詩を結ぶ。バーゴンジーは「死者と生者を結び付けるある種のコミュニティに関心を抱いた詩人たちとは異なり、ソーリーの関心は死の完璧な「他者性」にあり、死とは生者にとって非常に重要であった特質をすべて破壊するまったく異質な体験である」（*Hero's Twilight* 55）というテーマをこれらのソネットは追求していると主張するが、彼の主張には「これら2篇のソネットにおいて、ソーリーは来世の問題を取り上げ、それを拒否しているように思える」（78）と主張するシルキン同様に我田引水的な論理の飛躍がみられる。プレスの主張にあるように、この2篇のソネットに関する限りでは、ソーリーは「死」を「偉大な平等主義者であり、より豊かな生への序曲」として位置づけ、「積極的な受容」（209）の態度を表明しているの

である。

ソーリーの死に対する積極的肯定の姿勢は、戦友の死を歪んだ感謝の念で捉える姿勢へと発展してゆく。1915年の7月の後半にソーリーの小隊で1兵士が誤って手投げ弾を落し、その爆発で、その兵士は瀕死の重傷を負うという事故が起きたが、その事故を背景に書かれたと思われるソーリーの8月26日付けの書簡は、彼が戦争体験に対して2通りの異質な反応――戦闘による解放感と同時に負傷兵や戦死兵に対する非情さ――を示していることを物語っている。

> 未来を展望すると人はどこかに惨事を見ないわけにはゆきません。現在は――神に感謝すべきですが――機知を働かせるための「体験」は十分にあり（こういうふうにいうことは無神経なことかも知れませんが）、また夜間の無人地帯という長い墓地前方には自由と衝動があります。草がサラサラなびく音、遥かかなたの兵士たちの墓に十字架を打ちつける音、暗やみの中で敵の哨戒兵に対する心理的優位を確立しようと苦闘するときの兵士の緊張と沈黙、爆弾の爆発音と負傷した男たちの獣的な叫び。そして死、側の兵士が死んだときの恐ろしいまでの感謝の念。「砲火のもとで彼を担ぐ必要はもうない。ありがたい。ただ引きずればよいのだ」。巨大で無抵抗な死体を暗闇の中で引きずること、潰れた頭のゴツゴツいう音。それ［負傷兵］がうめくのを停止したときの安堵感、弾丸あるいは爆弾がその男を動物にし、次にその動物を死体にしたときの安堵感。人は現在では非情になり、偽りの同情を浄化され、多分以前よりも利己的になっています。対戦のときには、精神的なものと獣的なものとが鋭く分離し、交互に肉体を支配するものです。

この書簡には、暗闇の中に延々と続く無人地帯を見て、ソーリーが戦闘による解放感と興奮とを味わい、同時に友軍の中で負傷によって戦闘能力を失った者に対する非情ともいえる自己中心的な排他性を忠実に表明しているが、人を動物にし、その動物を死体にする戦場という過酷な現実にあっては、人間の精神の奥底にある聖なるもの（ヒューマニズム）と自己保存本能やその裏返しとしての戦友への非情さとが肉体を巡って相克するのである。詩人はこの書簡で初めて、自分の内部にある異質な両要素の併存を意識しているが、この問題の解

決を試行錯誤しているわけではない。このような問題は後にサスーンやオーエンにとって深刻な問題となって展開してゆき、彼らが反戦詩人としての地位を構築する上で不可欠な要素となっていくのである。

銃後にいる一般市民たちは、戦線にいる兵士たちの情感を獣的次元にまで落としめる大戦に対して無知であり、大戦を旧態依然したロマンティックなイメージで把握することに疑問を抱いていなかった。このような一般市民の大戦に対する無知と安直なナイーヴな態度を、ソーリーの戦死後その所持品の中に発見された「君たちが無数の無言の死者たちを見るとき」と題する詩は攻撃している。銃後で安全な暮らしをしている市民たちの夢に現れるのは雄々しく勇敢に戦う兵士ではなく、詩人が「青白い大群」と呼ぶ「無数の無言の死者たち」である。彼らはすべての感覚を喪失しているので、「安っぽい甘言」も、「賞賛」も不要である。彼らには「賞賛」と「潰れた頭に投げつけられた罵倒」との区別がもはやできないのであり、また彼らには

涙も不要。視力を失った目は流れる涙を見ることはなく
名誉も不要。死ぬのはたやすいこと
ただ「彼らは死んだ」とだけいうのだ。それにこう付け加えるのだ
「しかしもっとましな多くの人が以前に死んだ」と。

ソーリーは1914年11月18日付のマールバラ校の学寮長宛の書簡で『イリアッド』の中の「君よりもはるかにましなパトロクロスも死んだ」というアキレスの弔辞を引用し、「これ以上にまともですばらしいし死に対する言葉はこれまでなかった」と述べているが、「しかしもっとましな多くの人が以前に死んだ」という詩行は明らかにアキレスムの弔辞の影響が見られる。大戦で戦死した兵士たちより優れた人物が以前に死んだということは事実かも知れないが、彼らへの弔辞として安易な賞賛よりは適切である、というソーリーの主張には疑問が残る。「勝者も敗者も死においては同一だ。臆病者も勇者も、味方も敵も」と詠い、死の偏在的支配を強調しえた詩人の表現としては物足りなさを感じる。次に詩人は死者たちの「他者性」と死の絶対的支配を主張する。

溢れる群衆に目を凝らして見ても、もし君達が
これまで愛してきた者を認めたとしても

それはもはや霊に過ぎない。誰も君達の知っている顔をしていない
偉大な死がすべての者を永久に自分のものにしてしまったのだ。

ここでは戦死をヒロイックに見る姿勢はまったく見られず、詩人は死を生者と死者とを完璧に疎外し、死者たちを人間的な価値の入り込む余地のない完全に無感覚な世界に呪縛する絶対的覇者として位置づけている。

結論として、これまで考察してきたように、ソーリーには戦死する直前までブルックやグレンフェルなどの戦争賛美派的な傾向も明らかに見受けられたが、他方彼は次稿で論じるサスーン、オウエン、ローゼンバーグなどの反戦詩人たちの先駆者的役割も担っており、大戦を嫌悪し、糾弾する姿勢を呈示した。このように理由から彼を大戦に対して2種類の貌を有した架け橋的な詩人である、と位置づけることができるであろう。詩人はこの矛盾対立する2種類の貌を直視し、格闘するということを真剣には試みてはいないが、それを行うための詩的エネルギーを蓄積する以前に余りにも若くして戦死してしまった、と考えたい。

Works Cited

Bergonzi, Bernard, *Hero's Twilight*. 2nd ed. London:Macmillan, 1980.

---. "Late Victiorian to Modernist." *The Oxford Illustrated History of English Literature*. Ed. Pat Rogers. Oxford: Oxford UP, 1987.

Enright, D. J. "The Modern Age." Vol. 7 of *The New Pelican Guide to English Literature*. ll Vols. Ed. Boris Ford. London: Penguine, 1983.

Fussell. Paul. *The Great War and Modern Memory*. London: Oxford UP, 1975.

Perkins, David. *A History of Modern Poetry: From the 1890s to the High Mondernist Mode*. Cambridge : The Belknap Press of Harvard UP, 1976.

Press, John. "Charles Sorley: A Spirit of Stern and Stoic Feature."

Review of English Literature 7. 2 (1966) : 42-60. Rpt. in *Poetry of the First World War* (A Casebook). Ed. Dominic Hibberd. Hound-mills: Macmillan Education Ltd., 1981.

Silkin, Jon. *Out of Battle.* London: ARK Paperbacks, 1972.

Stallworthy, Jon. Introduction. *The Oxford Book of War Poetry.* Oxford: Oxford UP, 1984. xxvii-xxviii.

Untermeyer, Louis, ed. *Modern British Poetry: Mid-Century Edition.* New York: Harcourt, 1950.

----------ABSTRACT----------

The First World War and the English War Poets: From Thomas Hardy to Issac Rosenberg (Ⅲ)

Kiyoshi Yoshimura

Charles Hamilton Sorley (1895--1915) was one of the most baffling poets who actually experienced the horror and excitement of the early phase of World War I. He was only twenty he was made a captain in August 1915 but on October 13 was killed in action in the Battle of Loos.

Corresponding to his at times conflicting views of Germany and England, Sorley's war poems and letters reflect two different attributes of his artistic nature, which combine to characterize him as a "transitional" war poet. He simulataneously presents a two-sided view of the war until his death: one a romantic preoccupation and glorification of the conflict, and the other a strong disillusionment with, and vehement protest against, the waste, madness, and horror of the war. However,

curiously enough, these two different attitudes do not seem to conflict but merely coexist within Sorley's mind like the conspicuously patterned stripes on a zebra. He did not need to find the strength to resolve his different views because they did not represent any real threat to his artistic integrity. Thus, it is safe to say that he had established a position as a tranditional poet between those who favored the war such as Rupert Brooke and those who abhored it as Wilfred Owen did.